

鳥たちが、ギャッギャとけたたましい悲鳴を上げながら飛び去っていく。それを追うように、自然のものではありえない熱源が晴れた空を焼いた。

「ウィル！ 援護遅いつ！」

「今やります！」

ミレディの叱責に近い叫び声に応じるように、ざわりと森の木々がざわめいた。風に煽られるには不規則に、枝が揺れている。

それはすぐに、力強い動きに変わった。ぎちぎちと音を立てながら、無理やりとも思える速度で枝葉を伸ばしていく。

「来るわよ！」

けれど、枝葉が複雑に絡み合う天蓋を完成させる直前、再度熱波が奔った。

枝葉を焦がした紅蓮の炎を追うように、黒い巨体が覆いに体当たりをかける。引き裂かれ千切られる木々の音が、悲鳴のようになり響いた。

「まだ抑えてて！」

「はい！」

深く息を吸ったウィルが、両手の指を複雑に組み舞えた。鋭く吐き出す呼吸とともに、足元からぶわりと風が巻き起こる。

地を這うように広がった風が、巨体に蹂躪される木々に触れる。絡み合う枝を振り切つて空に飛び出した影の後ろに、飛び出した新しい枝が絡み付いた。

空に向けて羽ばたいていた翼竜の体が、がくんと高度を下げる。思わぬ追撃に体勢を崩し、そのまま勢いよく地面に突っ込んだ。

カッと開いた翼竜の赤い口から、怒りに満ちた咆哮が迸る。耳を劈くような高温と、大地を振動させる振動。その二つが合いまった雄叫びに、木々がびりびりと揺れる。

翼を地面に打ち付けてのたうっていた翼竜が、黄色く濁った眼差しを周囲に投げる。

その双眸が、ウィルに向いた。

まっすぐこちらを見つめてたつ人間が自らの行動を阻む元凶だと察したのだろう。黄色い両眼が剣呑な光を帯びる。

直後、カッ開いた口から、紅蓮の炎が迸った。

まっすぐウィルに襲い掛かった熱波は、その数歩手前で不可視の膜に阻まれる。彼を取り巻くように球を描いた結界が、炎を遮つたのだ。

苛立ったような咆哮が轟き、炎が二度三度と浴びせかけられる。続けざまに浴びせられる力に、結界が揺らぐ。

「……っ！」

ぱしんと、ウィルの足元に置かれた法具の一つ、音を立てて弾けた。支えを一つ失った結界が、さらに頼りなく震える。

炎自体は遮ることはできても、辺りを焼き尽くすような熱波

までは防ぎきれない。じわりと温度を上げていく空気に、ウィルは唇をかんだ。

あと三度か四度炎を浴びれば、結界を作る法具は負荷に耐えかねて弾け飛ぶだろう。

それでも、印を結んだ指を解くことはせず、翼竜を繋ぎ止める鳶の維持だけに意識を向け続ける。

じわりと額に汗を滲ませ、ウィルは抗う敵を押さえ込むように指先に力を込めた。

「よそ見してる余裕なんて、ないんじゃないの？」
どこからともなく、ミレデイの声が響く。

直後、雲ひとつない晴天から一条の雷が落ちた。完全に不意を突かれた翼竜が九鳴を放つ。落雷の直撃を受け

た背中から、キラキラと輝く硬い鱗が何枚も散った。ウィルへ火炎の浴びせるのを止め、翼竜は血走った視線を周囲に投げる。けれど、ミレデイの姿は見えない。

姿なきまま、続けざまの雷撃だけが轟音を響かせて巨体を襲う。

苦痛の声をあげ、翼竜は体をのたうたせた。死に物狂いの力は先ほどまでより一層激しく、後ろ足に絡みついた鳶がギチギチと悲鳴を上げている。

「いいザマね」

そんな相手を殊更に煽るような声が響く。同時に空気が揺らいでミレデイが姿を現した。

翼竜の鼻先にもう一度雷が落ち、怒りの混じった咆哮が迸

た。

血走った双眸がミレデイを捉える。自分を追い詰める相手だと認識したとたん、翼竜の攻撃対象はミレデイに変わった。

続けざまに、紅蓮の炎が迸る。それだけでは飽き足らず、翼をのたうたせてミレデイに襲い掛かろうと暴れ始める。

熱波を見えない壁で防ぎきつたミレデイが、なおも挑発するように赤い唇を吊り上げる。

「あんたじゃ、私に敵わないわ」
その言葉を正確に理解したかはわからない。それでも、翼竜

が足掻く力はぐつと強くなった。
「ウィル、もういいわ！ 離して！」

歯を食いしばっていたウィルが一気に指を組み替え、術を強制的に終わらせる呪文を叫んだ。

そうでなくとも限界間近だった鳶が、バチンと音を立てて弾ける。

拘束が解けた反動で一瞬体勢を崩した翼竜が、すぐに翼を打ち振った。怒りに満ちた叫びを上げながら、一直線にミレデイに向かう。

ウィルは肩で息をしながら、ミレデイに襲い掛かる巨体を目で追った。火炎を難なく防ぎきつた結果も、巨体に体当たりされてはどうなるかわからない。けれど、迫り来る相手を見すえる魔女の表情からは、一片の焦りも窺えなかった。

術の反動でくらくらする視界を何とか保ちながら、ウィルは小さく呟く。

「五、四、三……」

一、と数え終わってから一拍置いて、ミレディが右手を掲げた。翼竜に向かって突き出された手のひらが、ぐっと握られる。

「縛！」

鋭い声に反応するように、突如翼竜の真下の地面から光が噴出した。七色の光が柱のように立ち上り、正確な七方形を描く。

光の柱に触れた巨体が、何かに引きずられるように落下した。どこか焦ったような叫びを上げ、翼をのたうたせ首をもたげる。けれど、どれだけ翼を打ち振ろうとも、体が浮き上がることはない。傷ついた翼が虚しく地面を打ち付ける。闇雲に吐き出される炎も、光の柱を超えることはできなかった。

翼竜を押さえ込む光の柱は、上方で少しずつその空間を閉じ始める。混じりあった色が次第に眩い白色に変わっていく。

光が閉じるにつれ、翼竜の動きが急速に緩慢になっていく。翼の先が、尾の先が、色をなくして石化を始めているのだ。

「もう無駄よ。あきらめなさい」

光の柱が完全に閉じる。最後通牒の言葉通り、翼竜の体から一気に色が抜け落ちた。

苦悶の叫びか、それとも怒りの咆哮か、顔を仰向けた翼竜がかつと口を開く。けれどその口から音が飛び出すよりも早く、体は完全に灰色の石に変わった。

光が粒となって消えた後には、生々しい迫力を持つ巨大な石像が残された。

「はい、封印完了」

ミレディの声に、固唾を呑んで光景に見入っていたウィルの肩から力が抜ける。

「はあ……」

堪えきれず、吐息が零れた。

「ウィル。ため息なんてついている暇はないわよ。さっさと周りの修復始めなさい。あと、鱗拾つといて、全部。翼竜の鱗なんて滅多に手に入らないんだからね」

「うわ、はい！」

慌てて顔を上げたウィルは、周囲を見回した。大木が何本もなぎ倒され、翼や爪にえぐられた地面は土が掘り返されている。炎にさらされた箇所は黒く焼け焦げ、まだ白い煙が立ち上っているところもある。

控えめにいつて惨々たる有様に、ウィルは慌てて駆け出した。千切れたまま地面に横たわる鳶に手を当て、術を完全に解けば、大きな森の木々から分けてもらった生命力が一気に身体に流れ込んでくる。それを今度は痛んだ幹にあてて慎重に送り返してやる。

無理をさせてしまったが、これだけ大きな森ならば、そう時間もかけずに傷を癒すだろう。

木々や植物の力を借りる術式は、ウィルにとって比較的得意とする分野だ。それでも、いや、それだからこそ媒体となる植物との相性は術の成否すら左右しかねない重要なものだ。この森とは、比較的相性が良かったらしい。

借りていた力を返して息をついたウィルは、今度は足元に転

がる法具に手を伸ばした。

同時にいくつもの術を発動させるためには、法具は頼りになる相方だ。あらかじめ組み込んでおいた条件に基づいて、術者の手を煩わせずに魔法を発動させてくれるのだ。

「あー、やっぱり駄目か」

法具の一つを取り上げて、ウィルは嘆息した。透明なはずの水晶球が白く濁っている。それだけでなく、表面には細かな傷が無数に走っていた。もう一回強い衝撃を受けたら粉々に砕け散っていただろう。

ウィルの力では、翼竜の火炎を完全に防ぎきるだけの術式は組めなかったということだ。

念を入れて五つ用意していた他の法具の状況も似たような状況だった。そのうち一つは、完全に砕け散ってしまっている。

「まだまだだな……」

ぼやきながらも、ウィルは法具を丁寧に拾い上げ、取り出した荷袋に収めていった。持ち帰って検証すれば、何が足りなかったか分かるかもしれない。失敗から手がかりを得るのは、効果のよい勉強法だ。

最後のかけらを放り込んだウィルは、肩をすくめて気持ち切り替える。もう一つ袋を取り出して地面に目を凝らした。

ミレデイにいわれたとおり、雷撃で飛び散った翼竜の鱗を拾うためだ。

草の間でキラキラと輝く一枚を取り上げ、太陽にかざす。手のひらと同じくくらいの大きさの鱗は、深い緑色をしていた。爪

先で弾けば、キンと硬質な音がする。これに全身を覆われているからこそ、翼竜は幾度も雷撃に倒れなかったのだろう。

そして、この恐ろしく硬い鱗は、魔法薬の精製にとって非常に役に立つ材料でもあった。

もともと気性が荒く攻撃的な翼竜は、人里離れた山奥、それも断崖絶壁の岩山を好んで住処とする。その分鱗を手に入れることは困難で、今回のように偶然人里近くまで降りてきた個体から手に入れるくらいしか手段がないのだ。

なかなか市場にも出回らない分、鱗は非常に高価だ。ミレデイが厄介な相手の処理依頼を二つ返事で引き受けたのは、採取した鱗を持ち帰る契約だからだろう。

ウィルはかがみこんで目を凝らし、草の間で光る鱗を根気よく拾い集めていった。魔法を使って一気に集めることも可能だが、ミレデイが石化された翼竜の封印処理をしている今、余計な魔法で邪魔をしたくはなかった。

青く茂る草の間に落ちた鱗は、なかなかに見つけにくい。雷撃の激しさを物語るように広範囲に飛び散っているのも厄介だ。じわりと額に汗を浮かべながら地面に目を向けていたウィルは、ふと手を止めた。

「あれ、これって……」

視線の先には、親指の先ほどの小さな青い花を咲かせた雑草が群生していた。

「ええと、これ、スースリーナだっけ？」

スースリーナは古代語で『小さき青』を意味する名を持つ四

季咲きの多年草だ。暑さ寒さに強く、種子だけではなく地下に這った根かも新たな仲間を増やしていく。一株一株は小さいくせに、やたらと生命力と繁殖力が強いのが特徴だ。

魔法薬の材料としてはあまり効果がなく、重宝される部類のものではない。

けれど。

「あれ、花びらつて七枚だっけ……?」

小さな花弁を見つめ、ウィルは考え込むように眉根を寄せた。乾燥粉末として利用するのが通常であるだけに、花の全貌を思い出せないのだ。うっすらとした記憶では、花弁は六枚だったように思う。だとすればこれは別の種類の花なのだろうか。

「ウィル、回収終わったー?」

首をかしげ悩むウィルの背に、ミレデイの声がかかる。

「あ、ごめん、もうちょっと!」

「何やってんの。こっちはもう済んだわよ」

「うわ、ごめんなさい!」

慌てて立ち上がったウィルは、両手を組んだ。封印作業が終わったのなら、もう魔法を使っても影響はないだろう。

口の中で一つ呪文を唱えれば、あちらこちらから光る鱗がウィルの元へと飛びこんでくる。両手いっぱい集まったそれを丁寧な袋につめたウィルは、ふと思いついて小さな花を一輪摘み取った。あとで確認するつもりで、それも一緒に袋にしまいこんだ。

「ごめんなさい、終わったよ」

「どれくらい集まった?」

ミレデイの元へ駆け寄れば、手持ち無沙汰だったらしい魔女は長い黒髪をかき上げて問うた。

「ま、それくらいあれば十分ね」

ウィルが差し出した袋を一瞥して、ミレデイが唇を持ち上げる。

「こっちの道具も片付けといて。あと帰ったら報告書の作成」

そつけないくらいの指示をうけて、ウィルは足元に転がる水晶玉を取り上げた。ウィルの作ったものより二まわりは小さいそれは、傷一つ曇り一つ見受けられない。たった一つで翼竜の火炎を防ぎきったことから、彼女の技術が段違いに高いことは良く分かる。

「凄いなあ……」

感嘆の吐息をこぼすウィルに、ミレデイは苦笑をこぼす。

「何よ。私を誰だと思ってるの。それより、あなたの道具はどうだった?」

「あ、ええと、全壊したのが一つ、半壊が三つ、何とか修理できそうなのが一つ」

歴然とした差に顔を赤らめながら報告すれば、ミレデイの口元に笑みが浮かんだ。

「ま、最初にしたら十分じゃない? 次作るときに全壊しない程度に精度が上がってれば合格よ」

「うん」